
魔王と勇者と聖剣の妖精

tukasa

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔王と勇者と聖剣の妖精

【Nコード】

N6580V

【作者名】

tukasa

【あらすじ】

あまりに暇で勇者を自分で作ることにしました魔王。勇者に聖剣ゼロと聖剣の妖精ゼロ（本当は魔王の分身）を用意し、無理やり魔王討伐へと追いやります。

しかし、聖剣ゼロは強い相手には強いが、弱い相手には弱くなる。ザコモンスターに苦労したり、魔界四天王を一撃で倒したりしながら、勇者とゼロは魔王城を目指し旅を続ける。

勇者を作る前に（前書き）

この物語はフィクションですね。

この物語はまだ始まっていません。

勇者を作る前に

こんにちは、魔王です。

この前の世紀末に勃発した聖魔大戦も無事終わり、実に平和な日々が続いています。

平和すぎて退屈です。

少し前までは、勇者と名乗る人間がちよっかいを出して来ていたのですが、いい暇つぶしになっていたのでですが、最近では勇者が来てくれません。なぜでしょう？

この前、寝ているところに来た、とある国の軍隊がうるさかったので、手加減しなかったからでしょうか。

それとも、暇つぶしに「勇者100人切り」と称して、人間界から勇者をさらって来たからでしょうか。

昔は何かにつけて「魔王討伐」がブームで、常に勇者が来ていたそうなのに。

一体、最近の勇者は何をしているのでしょうか。魔王がこんなに退屈していると言うのに。

そこで一つ名案があります。

勇者がいらないなら、作ってしましましょう。

先日、時の女神と飲んだ時にも

「簡単だから、魔王さんが自分で作っちゃいなよ」と言っていたので、問題ないでしょう。

そんな訳で、人間界から素質のありそうなものを選んで、神託を与え

ます。

「貴方、明日から勇者ね。しっかり強くなって魔王を倒しに行きなさい。」

これで準備は整いました。きっと少し待てば、強くなった勇者が来てくれるに違いありません。

しかし、世の中そんなにうまくはいきません。いつまで立っても勇者が旅にすらでません。

仕方がないので、この前ビンゴゲームで当たった、「聖剣ゼロ」を与えます。

この聖剣ゼロはあらゆる魔力を吸収し、持つ主に力を与えてくれる性質を持っています。

私との相性も最高です。普段から魔力を放出している私の側にいるだけで、持ち主は魔王レベルの力になります。

ちなみに、私が使うと一振りで大陸が消し飛んでしまうので、今まで倉庫にしまっていました。

さて、ようやく準備が整いました。

直接渡しに行く訳にはいきませんので、勇者の家の近くに洞窟を掘り、祭壇を作って聖剣ゼロを突き刺しておきます。

そして、また勇者に神託を授けます。

「洞窟の奥に聖剣があるから、それを使って魔王を倒しなさい」

次の日、勇者が聖剣を取りに来ました。が、聖剣を引き抜けません。別に、真の勇者しか使えないとか、特別な呪文を使うとかはありません。

単純に強く刺さり過ぎて、人間の腕力では勇者であろうと抜けなかったのです。

しかし、そんなこともあろうと、すでに手はうつてあります。
私の分身を変身させて、祭壇にスタンバイさせているのです。

さあ、いよいよ出番ですよ。起きなさい、ゼロー！

勇者側の事情（前書き）

まだまだ、物語は始まっていません。

勇者側の事情

こんにちは、村人Aです。

最近では魔物の数も減り、平和な日々が続いています。平和過ぎて、武器屋の息子としては、店の将来が心配だが、最近では親父が趣味で始めたパンが評判になり、武器屋だった頃より儲かっているらしい。俺が継ぐ頃には、立派なパン屋になっていそいだ。

そんなに平和な日々が一夜にして崩れ去った。

いつものようにベットで寝ていると

「・・・なさい」

「ん・・・フガッ!？」

何か聞こえたような気がしたので、起きようとしたら、突然横腹に強烈な蹴りが入った。

ベットから蹴り出され、床に叩きつけられた。

その時、空中でクルクルと回転したような気がしたが、気のせいだろう。

人間そう簡単に回転しながら飛んで行かないはずだから。

なんとか起き上がると、そこには影のような真っ黒な服を着た女性が椅子に座っていた。

透き通るような銀色の長い髪、服とは対象的な白い肌。ダルそうに椅子に座っているが、どこか威圧感を感じる。

そして、こちらが起き上がるのを確認すると、

「貴方、明日から勇者ね。しっかり強くなって魔王を倒しに行きなさい。」

そういうと、右手のそばに下がっていた紐を引いた。
すると突然、全てが闇に覆われ、先ほどの銀髪の女性は愚か、自分自身すら見えなくなつた。

それから時は流れ、再び銀髪の女性が目の前に現れ、

「洞窟の奥に聖剣があるから、それを使って魔王を倒しなさい」

それだけ言うと、また紐に手をかけ引こうとしたので、

「ちょっと待って下さい。消える前に俺をここから出して下さい」

そう、あれから約一月ほど暗闇の中に閉じ込められていたのです。

最初は勇者になるための試練か何かだと思っていたが、あまりにも長過ぎる。

「ああ、そう言えばコレ、闇の空間に相手を閉じ込めて、ジワジワ精神的に追い詰められるのを見る魔法だったわね」

何やら恐ろしいことをブツブツ言いながら、左手近くの紐を引く、

突然、足元の床が開き、穴へと落ちていき、途中で気を失つた。

そして、久々に自分のベットで目が覚めることができた。

起きてから、家の裏を見てみると、そこには初めて見る洞窟が出来ていた。

しようがないので、その洞窟に入り奥へと進んでいく、祭壇に剣が刺さっていたが、抜こうとしてもビクともしない。そもそも、持ち手の半分くらいまで祭壇に埋まっており、祭壇を壊さない限り先ず抜けそうにない。

諦めようとした時、どこからか声が聞こえた。

「さあ、いよいよ出番ですよ。起きなさい、ゼロ！」

勇者を導くのは、妖精の仕事

「さあ、いよいよ出番ですよ。起きなさい、ゼロ！」

洞窟に響き渡る声

勇者（仮）の青年は、何が起るのかと身構える。

が、いくら待っても特に何も起きなかった。

勇者（仮）は諦めて帰ろうと祭壇に背を向けた瞬間、顔の横を凄まじい速さで何かが通り過ぎた。

勇者（仮）が振り向く暇を与えることなく、祭壇が洞窟の壁へと吹き飛び、砕け散り、聖剣はその勢いのまま、今度は洞窟の壁に突き刺さっている。そして祭壇のあった場所には、小さな妖精がいた。銀色の髪に白い肌、そして黒い服を着た妖精が、なぜかハイキックのポーズで空中に静止していた。

「ふう。なんとか間に合いましたね。」

祭壇にハイキックをカマした妖精は服の埃を払いながら一息吐く。そして、壁にめり込んだ聖剣を片手で掴み、引き抜くと、フワフワと勇者（仮）に近づき、

「え〜と、おめでとうございます。あなたはこの剣に選ばれた勇者です。」

「さあ、魔王を倒しにレッツ、ゴーです」

妖精はそう言うと、手にした聖剣を勇者へと放り投げた。

勇者は一回落としそうになりながら聖剣を受け取り、

「あの、すみませんが、あなたは何者ですか？」

と、当然の疑問を投かける。

すると、銀色の髪の妖精は、

「えっ、あたし？。あたしはまおうの・・・ではなくて、聖剣の妖精はゼロよ。あなたを魔王のとこまで、無事に届けるのが私の役目だから、これからよろしくね」

銀色の髪妖精ゼロはそう言うと、右手を差し出して来たので、

「僕は名前はタロー。これからよろしく、ゼロ。」

「ウゴツ!？」

ゼロの手を取り、握手をしようとした瞬間、ゼロは手をグーにする
と、タローのボディブローを決め、倒れかかるタローの胸ぐらを
掴み、耳元に囁くように

「コラ、何呼び捨てにしてんだ。ゼロ「さん」だろ。」

「こっちはお前の10倍は生きてんだ。年上には敬意を示さんか。」

「ゼ、ゼロさん。失礼しました。これから、よろしくお願いします。」

「

ようやく、勇者タローと聖剣ゼロと妖精？ゼロの旅が始まりました。

勇者を導くのは、妖精の仕事（後書き）

そして、次回はなぜかクライマックス（予定）

先に結末を決めてしまいます。

果たして、勇者タローとゼロは魔王を倒せるのか！？

(間話) 最終決戦直前 魔王の思い(前書き)

いきなり最終章スタート
ここに到るまで、小説にして4巻+スピノフ1巻分の物語がありました。

剣の修行をして少し強くなって、巫女と出会いさらに勇者らしくなり、敗北を味わい師匠と呼べる人ができた。そして、聖剣と仲間を失い、自分が作られた存在と知り、進む道を見失う。しかし、絶望から立ち上がり、新たな力と仲間を得て、再び魔王討伐へと歩き出した。

長い旅の末に魔王城にたどり着き、いよいよ魔王との直接対決をむかえる。

魔王と勇者と聖剣の妖精

第1巻 勇者のお供も楽じゃない？

第2巻 勇者といえば、聖なる巫女？

第3巻 勇者ってなんですか？

第3・5巻 巫女のラブラブ大作戦(愛は勇者を救う、ほか)

第4巻 勇者とは勇ましい者と書く？

第5巻 勇者さん、いたんですか？

(間話) 最終決戦直前 魔王の思い

魔王城 魔王の間

魔王の間の扉が開かれる。

一体どれほど、この時を待ちわびたか。

適当に選んだ勇者は、予想外にも魔王城までやって来た。

途中で聖剣は折れ、使いのゼロまで死んだ時は一度興味を失ったが、いつの間にか新たな力を得て、魔王城の側まで来ていると聞いた時には、さすがに驚いた。しかも、魔族の精鋭が集まるこの魔王城を一直線にこちらに向かって来たのだ。

魔王^{わたし}までの道のりは、運だけでたどり着けるような生易しいものではない。各所にはAKM48(悪魔48人衆)以上の猛者が門番として待ち構えており、特に魔王の間へと続く通路には、地獄の番犬ケルベロス^{わたし}を配置している。この番を手懐けるのに魔王ですら、手を焼いたほどの魔獣である。つまり、この扉を開けるものは、ケルベロス以上の力を持っている。

ここまでたどり着いた勇者を魔王としての威厳に満ちた態度でむかえてやりたいが、どうしても口元が緩んでしまう。

ようやく、今まで我慢した勇者^{オモチャ}で遊べるのだから

最終決戦（1）

扉を開け、広間にはいる。

そこには、いつものように玉座に魔王が座っているが、何やら表情が少し強くおかしい。

扉を開けた瞬間はまるで子供のような笑みを浮かべていたが、すぐに不思議なものを見ているかのように呆然していた。そして、少したつと目を細め、こちらを睨みつけ、

「なんで貴方がここにいるのですか、ゼロ？」

「しかも、何かいろいろ『混ぜって』いますね」

流石は魔王。いつもだるそうにしているだけの怠け者に見えるが、伊達に実力で魔王になっただけもことはある。面影ぐらいは残っているだろうが、この姿になったことは魔王は知らないはずである。それなのに一目であたしがゼロだとわかったただけではなく、『混ぜた』存在まで見破るとは。本当は、ギリギリまで巫女の力を隠しておき、切り札にとっておきたかったのだが、暴露してしまっただけはしょうがない。

「魔王、お久しぶりですね。この体では、はじめましてですが」

「今のあたしは、魔族だった頃のあたしではありません。聖剣の精霊ゼロと人間の巫女ゼロと魔族の魔人ゼロが一つになった存在。そう、今のあたしはまさに『トリプル・ゼロ』。そして、生まれ変わったあたしは勇者のパートナーであり、魔王あなたの敵としてここに来ました。」

そう言うと、ピシッと魔王に向かって指をさす。

・・・決まった。特にトリプル・ゼロのネーミングは、一月前から考えておいたとおきです。

流石の魔王も言葉を失っていると思いきや、

「分かりました。ゼロ、貴方は敵ですね。」

さっきまでとは打って変わって、魔王の顔から表情が消え、言葉だけでも凍えそうな口調で言った。

いや、明らかに部屋全体の温度が下がっている。魔王から流れてくる魔力が周辺の熱を奪う。漏れ出した魔力でこれである。ちよつと意識するだけで、ここはたちまち極寒地獄になってしまつてあろう。

しかし、すぐに魔王は表情を戻しこちらにたずねてきた。

「ところで、勇者はどこにいますか？」

何やら魔王が不思議なことを言い出した。タローならあたしの後ろをついてきたので、すぐ後ろにいます。そう思い後ろを振り向くと

「なっ！タローがいない」

後ろにはさっき入ってきた扉があるだけで、タローの姿はどこにも無かった。どうやらあのダメ勇者は、魔王城で迷子になってしまったらしい。あれほど側を離れるなど言っただけなのに。

最終決戦（2）

ゼロが魔王の間にたどり着く少し前、勇者はゼロの後をかなり遅れて進んでいた。

「ハアハア、ゼロ速すぎ。」

肩で息をしながら、勇者は魔王の間へと続く長い廊下をトボトボ歩いていった。

始めはゼロが進む後を襲いかかる魔物を倒しながら進んでいたのだが、途中からゼロが魔物の相手が面倒臭くなったので、極力戦わない方向にしたら進む速度が2倍になった。

ゼロは魔人が混ざっているので体力が普通の人間の10倍近くはあり、一晩中でも走っていられるが、勇者は所詮は人間である。全力に近い速度で走り続けながら、魔物の攻撃を避けるのは非常に疲れる。

幸いこの辺りの魔物は中途半端な強さなため、ゼロを見逃すことは無かったようでした。つまり全滅しているので、こうして体力を回復できる。

「それにしても何て広さをしてるんだ魔王城は。よくこんなところで生活できるな」

勇者は愚痴をこぼしながら進んでいると、大きな扉の前にたどり着いた。

その扉は人が一人通れる程度空いているので、どうやらゼロはここ

を通って行ったようだった。
扉をくぐり抜け、部屋の中にはいるとそこは広いホールのようなところだった。

部屋の片隅に何やら黒塊が転がっていた。近くによってみるとそれが黒い毛皮の馬鹿でかい魔獣であることが分かった。どうやらゼロが倒していったのだろうとそのままスルーして部屋を出ようとしたら、後ろで獣の唸り声が聞こえた。振り返るとつきり死んでいると思っていた黒い魔獣が起き上がって、その目をこちらに向けていた。

「え〜と、ちょっとやばいかな・・・」

明らかにここまでにいた魔族達とは迫力が違った。

しかも、今のゼロの一撃を受け、まだ動けるだけでも驚きだった。どうしたものかと考えていら、向こう側がすごい勢いで襲いかかってきた。

三つの口を大きく開け、床ごと勇者に食らいついた。
が、三つの内、一つの口が閉じることなく勇者の目の前で開いたままになっていた。

「出来れば魔王までは力を使いたく無かったけど、しょうがないか」

勇者は魔獣の牙を掴みながら両腕に力を込め、魔獣の巨体を持ち上げ

「悪いけど、ここでお前に食われる訳にはいかないんでね」

そう言うと、魔獣を中に投げ、床に着く前に殴りつけた。

魔獣は声をあげることもなく、そのまま部屋の壁へとめり込む。さ

らに勇者は素早く壁まで飛ぶと、さつきよりも力を込めた一撃を受け放つ。黒の腕輪によって強化された一撃により魔獣は壁を突き抜け、少し離れた次の部屋まで吹き飛んでいった。

「しまった！力を入れすぎた。」

やはり、黒の腕輪を使うと手加減が難しく、無駄に力を込めてしまう。

折角なので力を補充しようと魔獣が破っていった壁の穴を通って奥にある部屋にはいると、そこには魔王とゼロが何やら呆れた感じはこちらを眺めていた。

そして、魔王とゼロはお互いに向かい合い、

「さあ、殺し合いを始めましょう」「」

「え」と・・・？「」

勇者一人だけテンションが違うが、いよいよ最後の戦いが始まる。

最終決戦（3）

「さあ、殺し合いを始めましょう」

掛け声と共にゼロは魔王へと飛ぶ。

内なる魔力により強化された脚力で魔王との間合いを一瞬で飛び越え、その勢いのまま拳を叩きつける。

強化された拳に光が集まる。魔力により強化された拳に聖なる巫女の祈りを一点に集中させ、全力の一撃を魔王へと叩きつける。

聖なる光の一撃は、魔族に対して当たればまさに必殺。魔王とてまともにくればかなりのダメージを受ける、はずだった。

「ゼロよ、この程度で私を倒せるとも思っていましたか？」

魔王はゼロの一撃を平然と片手で掴み、空いた方の腕でゼロへと拳を振るう。

ゼロは空中で体をひねり魔王の拳をかわすとそのままゼロを捕らえている方の腕を蹴り上げ、魔王の腕から開放されると宙で一回転して床に着地する。しかし、魔王は攻撃の手を休めず掌に魔力を集めゼロへと放とうとした時、

「ゼロ！下がれ！！」

魔王の頭上から勇者の声が聞こえる。

勇者の手にはあのハンマーがあり、巻き込まれない様にゼロは後ろへ飛ぶ。

勇者は魔王へとハンマーを振り下ろすが、魔王と勇者の間に黒い障壁が展開され勇者の一撃を止める。魔王はゼロ向けていた腕を勇者

へと向け闇の波動を放つ。しかし、勇者は闇の波動を避けようとせずハンマーにさらに力を込め叫ぶ

「光になれ〜!!!」

勇者の叫びと共にハンマーは光り輝きだし、障壁がもろとも闇の波動を光の粒子へと変えていく。

そのまま魔王へとハンマーを振り下ろすが魔王は紙一重でかわし大きく後ろへ飛んだ。

ハンマーはそのまま床の一部を消滅させ、元の色に戻る。

魔王は光の粒子へと変わって消滅した床と自分の服の一部を観ながら

「さすがに今のは焦りましたね。まさか全てのモノを光に分解するとは。古代の遺産ですか、昔のひとは恐ろしいモノを作りましたね。ですが、どうやらソレにはもう魔力は残ってないみたいですね。さあ、殺し合いを続けましょう」

まさに必殺の一撃を破られ、勇者はため息を吐く。ゼロの方を向くと向こうも勇者を見つめ、嬉しそうに答える。

「仕方ありません。アレをやりますよ。勇者さま」

最終決戦（４）

ゼロは勇者に飛びつくのと首の後ろに腕を回し、そのまま口づけをした。

すると、ゼロは光ながら大きくなり、魔王と同じ背丈までになった。かわりに勇者はほとんどすべての力を吸い取られ、その場に倒れながら

「ちょっと、吸いすぎじゃないか？」

「愛の力に加減は不要です！！」

ゼロは自分の体を確かめるようにあちこちかしてしてから、胸のあたりが少々重い。魔王、少しいらないますか？」

バキン！！

太い鉄線のきれる音が聞こえた。

魔王が黒い毛皮を被ったような姿に変わり、とんに向けて飛びかかる。指先には鋭い爪になりゼロを襲う。

しかし、ゼロは片手で受けながすとそのままカウンターをいれ、魔王を吹き飛ばす。

「ちょっと強くなりすぎましたか？」

「まさかここまでできるとは、予想外でした。仕方ありません。奥の手を使いましょう」

魔王は服の袖を引きちぎるとその腕に文字が浮かび上がる。

「ちょっと魔王！！魔界吹き飛ばすつもりですか！？」

「ま、運がよければ半分くらいは残るんじゃないですかね」

「こつちもなりふりかまっつてられまくなりましたね。勇者さま、飛びますよ」

ゼロは魔王からの魔力を吸収しながら転移魔方陣を作り上げる。

「全くなんて無駄量が多い。どこまで飛ぶかわかったものじゃありませんね」

「残念、どつやらこつちの負けね。さて、どこまで連れて行ってくれるの？」

魔王の魔法が発動する代わりに魔王城を何処かに転送させる。

その瞬間勇者は、

まだ、床に寝ていた。

光が魔王城を包み、そのすべてを消し去る。

そして、一年が過ぎ……

「勇者。そろそろ起きてください」

元の姿のゼロが勇者を揺らす。

「早く朝ごはん食べてください」

魔王が台所から顔を出す。

「おはよう、ゼロ、魔王。何か久々に日本にくる前の夢を……う
！！」

ゼロのボディープレスがきまる。

「そんなの昔のことより、バイト遅れますよ。昔と違って勇者じゃ
食べていけないんですよ。」

勇者とゼロと魔王は異世界まで飛んできた。途中、魔王城はどっか
に落ちてしまい。

力を失ってしまったゼロと魔王と、何も変わらない勇者は三人で暮
らすこととなり、二人の力が戻るのを待ちながら、資本主義の荒波
にもまれながら過ごすこととなった。

最終決戦（４）（後書き）

これで終わりです。

本当はもっといろいろ考えていたのですが、それを文章にするだけの力がありませんでした。

ゼロ（元の魔族）とゼロ（巫女）とゼロ（聖剣）の話はイメージはできているのですが。巫女にいたっては登場させることもできないとは。

もし、読んでくれた人がいたら、ありがとうございました。

それでは、ひどい終わり方になりましたが、
また機会があれば、どこかで。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6580v/>

魔王と勇者と聖剣の妖精

2011年10月28日01時14分発行